

演題6. 過去5年間における顎矯正手術の臨床統計的観察

○富田 薫, 宮手 浩樹, 横田 光正,
工藤 啓吾, 佐藤 和朗*, 三浦 廣行*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座,
歯科矯正学講座*

顎矯正手術は口腔外科において一般的となり、当科においても症例数が増加している。今回、同手術の適応範囲や安全性を再確認する目的で、最近5年間の顎矯正手術症例について臨床統計的に観察し、以前に当科より行った報告と比較検討した。対象は1996年から2000年までの5年間(Ⅲ期)に当科において顎矯正手術を行った、男性41例、女性93例、計134例であった。比較検討の対象は、1984年から1988年の5年間(Ⅰ期)と、1989年から1995年の7年間(Ⅱ期)の2期間であった。年間平均症例数はⅠ期:15.2例、Ⅱ期:16.9例、Ⅲ期:26.8例と増加していた。主訴はⅡ期では顔貌の変形と咬合不全が、各々48%、46%であったが、Ⅲ期では各々81%、10%と、顔貌の変形の割合が増加していた。これは、顎矯正手術により咬合不全のみならず、顔貌の変形も治療可能であることが紹介元歯科医師や、患者に認識され始めたためと思われ、顎矯正手術の適応の拡大につながった。同様に、臨床診断別症例数でも下顎非対称を主たる診断としたものがⅡ期4.3%からⅢ期13.4%と増加していた。病態の変化と共に術式の割合も変化してきた。両側に下顎枝矢状分割術(SSRO)を単独で適応した症例の割合は、Ⅰ期:92%、Ⅱ期:80%、Ⅲ期:59%と減少した。それに伴い、下顎非対称に対しSSROと下顎枝逆L字型骨切りの併用術を用いる機会が増加し、上下顎共に変形や非対称がある症例に対し、上下顎同時移動術を使用する機会が増加した。術式別手術時間は短縮し、出血量も減少していた。使用頻度が最も高い両側SSROでは、手術時間と出血量が各々Ⅱ期:227分、558ml、Ⅲ期:167分、266mlであった。これは術者の習熟はもちろんのこと、一層の愛護的操作、骨接合位置の工夫、顎間固定に要する時間の削減など、複数の要素によると思われる。Ⅲ期では、チタンミニプレートの使用や、術後のエラスティック牽引の併用により顎間固定を行わない症例が増加した。